

健康教育研究

— 養護教諭とともに —

山本 万喜雄¹⁾

Health Education Study

—Live together the School Nurse Teachers—

Makio Yamamoto¹⁾

Key words : Health Education, School Nurse Teacher

キーワード：健康教育 養護教諭

はじめに

子どもたちの人間らしい成長・発達を願って、信頼関係の中で子どもに寄り添い、苦悩や喜びを共有しながら子どもの健康保護と発達保障に尽力する養護教諭たち。近年、子どもの健康問題が変化し、学校教育の中では養護教諭への期待もますます高まっている。

周知のように養護教諭は、1947年に制定された学校教育法により、児童生徒の「養護をつかさどる」教員として規定されている。その前身は、「学校看護婦」という職種であり、恐慌や貧困による生活や健康の疲弊が著しい学童に対する学校内診療の必要性から明治後期に生まれた。その後、日本女性史に残る学校看護婦の身分確立運動の高まりの中で、看護機能と教育機能の結合した新たな教育職として「養護訓導」が国民学校令（1941年）によって制度化されたのである。その第17条には、「養護訓導ハ学校長ノ命ヲ承ケ児童ノ養護ヲ掌ル」とある。

戦後、憲法・教育基本法制下で、この「学校長ノ命ヲ承ケ」の文字は消えた。しかし、養護教諭の専門性との関連で、その現実を検討する課題は残されているように思われる¹⁾。

本稿の目的は、「養護教諭制度50周年宇和島集会」を記録するとともに、養護教諭による教育実践書の分析を通して、学校保健の仕事を教育活動の視点においてとらえようとするものである。

第1章 養護教諭制度50周年宇和島集会

1991年12月22日、健康教育のすぐれた伝統をもつ愛媛県宇和島市において、愛媛の養護教諭にとって歴史的な意義ある集会が開催された。その集会の正式名称は、「養護教諭制度50周年宇和島管内 退職者と現職者の交流会」という。

小春日和のその日、参加者は40名を越え、そのなかには都築紘（83歳）の元気な姿もあった。都築は1931（昭和6）年宇和島市立第一尋常小学校（現・明倫小）の学校看護婦として採用され、以来23年同校に勤務し、その後市内の城南中学校に6年間勤めた、養護教諭の大先輩である。かつて明倫小学校は、和霊小学校とともに学校衛生をリードしたことで有名だ。

集会はまず、学校保健研究50年、その学問的自立のために貢献されてきた唐津秀雄（愛媛大学名誉教授）による記念講演「学校保健の歩み」と、山本による「新しい養護教諭のあり方」と題する問題提起が行なわれた。

第一節 講演「学校保健の歩み」から

1937年、保健所法が出来、宇和島にはじめてモデル保健所ができた。その翌年、唐津は愛媛県学校衛生技師として赴任。その当時、学校衛生優秀校の明倫小学校には、樋口虎若校医、山口久米介校長、学校看護婦の都築紘がいた。きれいな「衛生室」があった明倫小学校は、太陽灯の照射、肝油服用、海人草（虫下し）

1) 愛媛大学教育学部
〒790 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790,
Japan

の全児童服用，病虚弱児の林間学校，机・イスの高さは子どもの発育にあわせる，学校給食の実施など，学校衛生のレベルはとびぬけてすぐれていた。

一方，反骨の生涯を貫ぬいた名校長，二宮彌助を中心にした和霊小学校は，1940年県内で初めてプールが建設された。健康教育だけでなく生活綴方教育も熱心であった和霊小の実践は，研究者の竹村一から「これぞ教育としての学校衛生」という高い評価を受けた。同校は，学校体育優秀校，学校衛生優秀校として表彰される。

以上，この宇和島は，健康教育のすぐれた伝統をつくったところであり，本日参加の元養護教諭は伝統の形成者である。

次に，学校保健の歴史のなかから何を継承したらよいか，何を発展させるべきか。

松山ではかつて「トラホーム洗眼婦」として辞令を受けた学校看護婦。(1937年12月に発行された愛媛県学校看護婦会の「会報」によれば，会員名簿には43名の学校看護婦がいた。)

そのころ，学校には「衛生室」はなく，理科の標本室などで子どもたちの眼を洗っていた。子どもが騒ぐので，他の先生からしかられながら仕事をしていた。松山の宮前小学校で見た光景は忘れられない。

「さあ目を洗いましょう」

「お目をきれいにしておかなくちゃいけないでしょう」

いまの若い人たちは知らないことばかり。しかし，古いことを受け継いでいかなければ新しいものはつけれない。その当時でも，洗眼，点眼はただ単に「診療」としてやったのではなく，自分のからだ・健康・いのちに対するスタンスは完全に教育だった。つまり，「教育の論理」で一貫して仕事を継承してほしい。

1941年，国民学校令によって養護訓導はできた。その成立は，国の政策と無関係ではない。しかし，そこに至るまでには学校看護婦による「職制運動」があったことを忘れないでいただきたい。日本で初めて広瀬マスが学校看護婦になったのは1908（明治41）年，唐津の生まれた年でもある。若い皆さんは，養護教諭身分確立の職制運動から学んでほしい。

以上のような唐津講演は，私たちに希望を与え，温故知新をこそ大切にすべきことを教えてくれた。

第二節 新しい養護教諭のあり方

教育保健学の構築をめざす唐津の軌跡。氏の研究業績『教育保健学序説』⁹⁾をとりあげ，健康診断は教育診断でなければならないこと（板書視力），学校保健は子どもの学習権保障の実現のために貢献すべきことな

どを紹介しながら問題提起を行なった。

トラホームから登校拒否に至る子どもの健康問題。時代が子どもの健康問題をつくると言えるだろう。教育の仕事は子どもの実態から出発しなければならない。

湾岸危機の情勢のなか仕事始は，登校拒否の相談からであった。そのケースは，自慢の娘（高2）がある日突然，学校に行けなくなった。数ヶ月苦しみ抜いた父親は，正月休みを利用して松山への2時間の道のりをひた走り，さらに男同士の話し合いは2時間半。文部省が「どの子にも登校拒否はおこりうる」と認識を変えても，普通の親にとっては寝耳に水の話だろう。しかし，説得よりも納得の言葉通り，徹底した話し合いは安堵の心を引き出したようである。解決というものは努力の末に生まれてくるものだが，その連続した延長上にない。そのことを感じてくれた父親。彼にそっと手渡したのが，石田和男編著『登校拒否をのりこえる』³⁾（青木書店刊）という一冊の本であった。

哲学者，山科三郎はこの本のなかで，「自分探し」の苦闘のプロセスを歩む子どもたちの姿を分析しながら次のように結論づけたのである。

「“私なんか”から“私だって”へと飛躍するのを援助したもの—それは一人ひとりのちがいを尊重し，丸ごと（人格）をうけ入れてくれる教師と子どもの，子どもと子どもの関係だった」と。

その高校生は，結局，自分探しの旅として「宝塚」に挑戦し，いまは大学生活をたのしんでいる。両親は彼女を信じて見守ったことを喜びかつ誇りにしている。

ところで，養護教諭制度50周年を記念する「愛媛県学校保健会養護部会研修会」の1ヶ月前，高校生の一人が新聞に次のような投書をし，県内の養護教諭たちにショックを与えた⁴⁾。

＊

養護教諭代える方法教えて!!

あんもないと(16)

単刀直入に切り出しますが，署名運動の仕方・手続きの仕方を教えて下さい。

実は，私の高校の養護教諭を代えてほしいのです。理由はあまりにも人間味がない態度しかしないからです。例えば，友人が胃炎で苦しみ保健室に運ばれたのですが，「何を吐いたの？ 味はどう？ どんな形や色をしていたの？ においは？」等と聞き，さらに自分では歩けないから運ばれたのに，「もどしたものの後始末は自分でやっておきなさい」と言ったそうです。友人はそれから3時間いすに座らされ，親が迎えにくる直前になってやっと横

になれたそうです。

さらに、別の寒気を訴えた生徒に対しては、「きょうは気温が下がると言っていたでしょう。先生でも肌寒いよ」と言って、まったく相手にされなかったそうです。けがをしても、すぐには手当てをせず、長々と周りの関係ない人たちにけがの理由を聞かせてから初めて手当てをするといった様子です。これでは、助かる者も死んでしまうのではないかと思います。

先日頭に来て、「けがや病気で苦しんでいる生徒は生きた標本ではありません。もっと相応の対応をして下さい」と言ったら、「保健室は教育の場です。周りの人にもけがをしないように促すためにそうしているのです。もっと優しくしてほしいというのは、あなたが甘えているからではないですか」という返事が先生から返ってきました。けがに対するいたわりや思いやりがあって当然と思うのは、私の甘えでしょうか。甘えるな、自分で責任を全部とれというのなら、保健室などなくてよいのです。

このような不当な扱いを受けた生徒が続出しているので、皆で署名運動をしようということになったのですが、具体的な手続きの仕方がわかりません。そこで皆さんの考えを教えてもらいたくて投稿しました。署名運動以上にもっと有効な手段があるなら、それも教えて下さい。お願いします。

(「愛媛新聞」1991. 7. 18付)

*

「ヤング落書き帳」のデスクによれば、追伸の形で次のような訴えが続いていたという。

「小・中学時代、友人にも出来ない相談があると保健の先生によく聞いてもらって保健室は“安らぎの場”と思っていた。なのに高校に入ってそのイメージが崩れてしまった。治療をしてもらいたいと思っても養護教諭の“いやみ”な質問のことを思うと自然に足が遠のいてしまう。それを先生はけが人が減って良くなったと勘違いしている。」

大規模校では、日々の多忙がその人の優しさまでも奪いがちである。この問題提起に対して養護教諭からの釈明あるいは反論が期待された。しかし、その動きはあったが、なぜか紙面には反映されなかった。

この高校生生の投書をめぐって、私は集会のなかで次のようなことを指摘した。

青年は歴史をつくるパワーにあふれると同時に、爆発すれば全世界を吹っ飛ばす危険なエネルギーを持っている。愛媛の管理主義教育によって窒息しそうな学校の生活に風穴あけるもの、それが「ヤン落」といえば言いすぎだろうか。あまりに非人間的な扱いに抗し

て投稿すると、誰が書いたか調べあげる教師もいる。批判なくして進歩なし。この健全な批判精神をなぜ骨抜きにしようとするのか。いま親や教師に求められるのは、若者たちのそのけなげなつぶやきにそっと耳を傾けることではないのか。まさに信頼なくして「ヤン落」なし。彼らの意見表明権を大事にしたいと思う。その上で投稿者に伝えたい。

①学校規模と養護教諭の対応について

②養護教諭の排斥ではなく、複数配置の実現をそして、集会の仲間とともに考えたい。

①「保健室は教育の場」という真の意味について

②理想の教師を

教師像といえば、30年前、スガワラヤスマサによって提唱された4つのク運動について知っているだろうか。

ハク（ズック靴をはいて子どもの中へ）

カク（記録を書いて仲間の中へ）

キク（要求を聞いて父母の中へ）

ツク（反動を衝いて闘いの中へ）

「マキは一本では燃えない。組み合わせることで炎となって燃え上がる」。こんな素敵なことばをつくった岩手の教師、菅原は、退職後も地域に根をはって、生き生きと生きている。

愛媛の若者・教師も捨てたものじゃない。時間をかけていねいに何かをつくらうという人がいる限り、なんとかなるんじゃないか。静かなる情熱一ふかく、やさしく、あたたかく、燃える思いを伝えたいのである。

〈ひとりの仕事でありながら ひとりの仕事でない仕事〉

この静かな日々のつながりこそ大切にしたいと願っている。今後も、養護教諭とともに歩みたい。

第2章 養護教諭とともに

本章ではすぐれた仕事をしている養護教諭たちが書いた著作を紹介したい。

第一節 健康文化の営みに参加する喜び

〈ひとりの仕事でありながら ひとりの仕事でない仕事〉⁹⁾

これは、京都・五條坂にある河井寛次郎記念館で見つけたいのちある言葉である。『学校で健康文化を創る』¹⁰⁾という本書に登場する養護教諭たちの仕事を一言で言えば、この芸術家の言葉がふさわしい。

さて、戦後50年という節目の1995年、学校5日制が月2回に拡充された。この政策は、子どもたちにとって大切な時間をつくる一方で、学校行事・自主的活動

の縮小がいっそうすすんでいる現実もある。たとえば、全国養護教諭サークル協議会の北海道研究集会（1994年）では、次のような指摘が行なわれた。

「学校の自治活動をめぐる状況についてみると、子どもが塾・部活・学校でゆとりがなく自己をみつめる時間がない。塾通い、5日制などで時間確保が難しく、学校全体の委員会活動が低下してきている。子どもの荒れがひどく、その対応に追われ委員会活動どころではない。子どもの訴えがあまりに多くなり休み時間に委員会活動の指導は不可能になったなど、子どもの自治活動をすすめていく上でかかってない厳しい状況を引きずっている」（東京芽の会・中條和美）

こうした状況は全国的な広がり呈している。そういう時だからこそ、子どもが輝く保健委員会活動の報告は強く求められていたのである。

ところで、保健委員会活動の指導は、特定集団の子どもたちに計画的・継続的な指導ができるので、養護教諭にとって教師としての力量が発揮できる良い機会である。もちろん子どもたちの自治活動を組織するという観点からいえば、その学校の民主主義の成熟度が問われることになる。この保健委員会活動を通してどのような力を育てるのか。本書の執筆者である松尾裕子は、次のような願いを持って働きかけているという。

- からだのしくみや命の大切さがわかり、自分のからだや健康について見つけ、自分で努力しようとする力
- みんなのからだや健康の問題を見つめ、どうしたらいいか考えられる力
- その問題にかかわって、仲間と共に取り組もうとすることができる力
- からだや健康についてのみんなの願いや要求を受けとめ、その実現に向けて仲間を組織することができる力

本書には、小学校・中学校・高校から選ばれた4人の養護教諭（松尾裕子、高岡信子、天木和子、橋本喜美代）のすぐれた教育実践が収められている。

まず小学校の保健委員会活動からとりあげることにしよう。保健委員会を通して学校中に健康の文化を広げたい。そんな夢を具現化するのが大阪の松尾。酸性雨の調査活動を通じて子どもたちに社会の治癒力の存在を気づかせるのが、高知の高岡。

① 小学校（大阪）の松尾実践

人間にとってあてにされることがどんなに大切なことか。松尾の人間観を鍛えたのは、側弯症の治癒体験をもつ保健委員長との出会い。子どもは責任ある仕事を与えられ、確かな指導があると伸びてゆ

く。また、「タバコ調査隊が行く」から読みとれることは、地域活動への参加が意欲を育て、その成果が健康の「文化財」として受け継がれていくということ。松尾の実践に健康の権利と連帯性の観点が息づいているのは、かつて人間らしい生活をめぐってたたかわれた堀木訴訟とかかわった経験があったからであろう。子どもとともに地域の中へ。私たちが学ぶべき大事な観点といえよう。

② 小学校（高知）の高岡実践

日本列島のなかでも、自然に恵まれている四国。とりわけ、高知県香美郡物部村にある大栃小学校は、緑ゆたかな美しい学校である。ところが、このダム湖の村にも酸性雨（P.H.5.6以下）が降り、その大切な自然と環境は少しずつ蝕まれているそうである。養護教諭の高岡信子は、委員会活動を通して子どもたちに〈水と環境〉というテーマの重大性を気づかせる一方、保健委員たちは地道に調査活動に参加し、環境汚染の事実を工夫しながら伝えるのであった。このプロセスこそ、「自治の力をつける」道。高岡によればその力は、「問題意識を自分のものとし、調べたり確かめたり考えたりした上で、皆に訴えたり、解決できることを実行に移したりすることによって獲得されるという。この高岡実践からは、主権者を育てるという大事な観点を学ぶことができよう。

次に、保健委員会の活動が学校を変えていった、中学校における典型的な事例について注目したい。

③ 中学校（東京）の天木実践

「行事の取り組みを通して民主主義を学び、文化創造の主人公になる。」これが天木和子の願いである。子どもの現実からの出発というけれど、生徒たちの家庭環境は厳しく、生徒指導に追われる日々は辛い。だが、天木は「来ればいいほう」と言われていた委員会活動を見事に再生。信頼関係を深めるなかで、文化祭の意義をていねいに語り、イメージを豊かにふくらませ、その意欲を育てていった。1～3年生までの混合班をつくり、各々の班はメンバーの持ち味を生かしながら発表会へ。その過程ではニュースでその活躍ぶりが伝えられ、やれば出来るという達成感の喜びを体得していった。「タバコの手」から「インスタントの悲劇」へとテーマを展開させてきた天木実践からは、子どもは学び行動するなかで変わっていくという教育の原則を教えられた。

④ 高校（山口）の橋本実践

自分たちの健康問題に目を向けて、その学びを保健委員だけでなく、全校で楽しみながら「わかちあ

える」健康文化の創造をめざす山口県立大嶺高校。その中心に居るのが「健康に生きる知恵と力と技を身につけてほしい」と願う養護教諭の橋本喜美代。橋本実践の魅力は、なんといっても活動の継続性にある。文化祭での発表を軸にした学びのベースには、前年度の保健委員が作成した「小冊子」や等身大の骨格づくりをはじめとする生徒たちの「作品」がある。新委員は、その成果と課題を学習しながら新しいテーマを選び、活動をすすめていく。その過程では保健委員会通信での学びあい。活動の最大イベントは、文化祭でのクラス対抗クイズ大会。現代を生きる高校生とともに内的満足感をくぐりながら成長する養護教諭。頼もしい限りである。

『学校で健康文化を創る』この本には、こうした健康文化の営みに参加する喜びが満ち満ちているのである。

第二節 信頼と安心の保健室づくり

「登校拒否最多 8万人突破」

これは、1996年8月に発表された文部省の学校基本調査速報を報じる新聞の見出しである。それによると、1995年度に「学校嫌い」を理由にした長期欠席（年間30日以上）の小・中学生は、81,562人であったという。この数字に、欠席が30日に満たない子どもや保健室登校の子どもたちなどを加えると、実にこの数倍の数になるであろう。

『教室へ行かれない子どもたちとともに』⁷⁾と題する本書は、今日的課題である「保健室登校」についての、養護教諭による集団的労作である。長野県教職員組合養護教員部が、なぜこのような子どもに開かれた保健室づくりの成果をまとめることが出来たか。それには次のような歴史的背景があった。

まず集団として養護教諭の仕事を見つめる同養護教員部は、1980年から養護教諭の歩みをまとめる作業に着手し、1984年に『礎』を刊行。そこでは、戦前に学校看護婦として誕生し、身分確立の職制運動のなかで養護訓導と変わり、戦後に養護教諭になった長野県における歴史が収められている。また1985年には、学校保健研究者の藤田和也（一橋大学）の協力を得て、同組合を支える養護教諭サークルのメンバーたちは『保健室からのメッセージ』『愛と性・教育への挑戦』（いずれも銀河書房刊）を刊行した。さらに1990年に同養護教員部は、子どもの側に立つ教育実践集『のびや葦上・下』を出版したのである。今回これらの著作を読み返して痛感したことは、養護教諭の成長、とりわけ自立へのプロセスの輝きであった。その仕事に誇りをもつ人々が、自らの感受性と論理性に水やりを忘れ

ない姿は美しい。

子どもの現実から出発し、信頼と安心の保健づくり尽力する養護教諭たち。保健室登校・不登校・ツッパリ・いじめなどに言及する本書は、四部構成。まず長野県の不登校・保健室登校の実態報告。ついで「教室に行かれない子どもたち」の実践事例（小学校7編、中学校4編）。そこに書かれている「分析」があざやかである。そして「保健室登校にどうかかわるか」の座談会。終章は共同研究者の藤田和也による保健室登校に関する総括から成り立っている。

ゆたかな学習によって力をつけてきた養護教諭の仲間たち。心理学研究者・高垣忠一郎の定義に学びながら、不登校について次のように定義した。

「学校へ行かなくてはいけないと思う気持ち、行こうとする意志がありながら、行こうとすると身体的・精神的に拒否症状が現れる場合を『登校拒否』と呼び、そうした登校拒否や怠学その他の事情によって学校へ行かない状態をすべて含んで『不登校』と呼ぶ」と。

次に長野県の不登校・保健室登校の実態から紹介することにしよう。

調査から見えるもの

1994年2月に調査された不登校の実態（協力校は小学校375校、中学校184校。回収率は小学校92.1%、中学校94.4%）によると、不登校を抱える小学校が5割、中学校8割であった。学年が進むにつれて男子の方が多くなる点に注目している。

保健室登校においては、逆に女子に多く見られるという。保健室登校の子どもたちへのかかわり方や対応については、次のような原則や方法を導いている。

- ① 保健室登校の子ども最終目的は、ただ「教室に帰すこと」にあるのではなく、「自立への援助」であること。
- ② 保健室での子どもへの対応は、こちらが指示したり、リードしたりするよりも、本人の自信をとり戻したり、自主性や主体性を育む方向でなされる必要があること。
- ③ 保健室での子どもの過ごさせ方は、小学校段階では少しずつ行動範囲を広げ、できる限り学校内の多くの人とのかかわりを増やしていく工夫をすること。
- ④ 保健室での過ごし方で、小学校では作業や活動が主に取り入れられ、中学校では養護教諭との対話が重きをなしていること。

こうした調査の結果から、保健室の条件整備の必要性、養護教諭の複教配置が導き出されている。また、子どもたちの保健室への注文が率直に示されているこ

とも、保健室づくりの上からはとても大切なことである。

子どもに開かれた保健室づくりの実践

確かな視点と心をとらえる表現力、核心を衛いた問題提起。本書の魅力は、「教室へ行かれない子どもたちとともに」成長する養護教諭の実践記録にあるといってもよい。ここでは、弱点をかかえた教師や父母とも連帯してたたかう姿が描かれているので、実にリアルである。たとえば、新任の養護教諭が「いじめられても登校し続けた正彦君を支えて」の報告。「余裕のない教職員の犠牲者は子ども」とか「疲れ果てた教師に傷ついた子どもの心の叫びが聴きとれるでしょうか」という言葉のなかにも、仲間とともに矛盾を克服していこうとする気迫が感じられる。信頼できる空間や人間関係が保障されているからこそ、このような勇気をみせてくれるのかもしれない。

藤田が指摘するように、「保健室だけが安心と信頼を保障できればいいのではもちろんない。学校全体がそれを保障し、誰もがすくむことなく、否、来ることが楽しくなるような学校生活を用意できなければならない」のである。その意味からいって本書は、保健室実践を通して学校づくりの課題を提示しているともいえるだろう。

ところで、長野県教職員組合養護教員部には力量ある養護教諭がいた。『保健室—子どもの声がきこえるとき』（青木書店）の著者、坂口せつ子である。坂口の教育実践に触発されて、元同僚でもある児童文学者の和田登は、保健室を舞台にした作品『はけん室のちーちゃん』（新日本出版社刊）を執筆した。この作品は、保健室登校のなかで成長する子どもをあたたく描きながら、学校保健の仕事を教育的な観点からきちんとしてとらえている。いつもみあげる浅間山のように情熱をそそぐリーダー坂口の存在は、養護教諭の成長にとって実に大きな意味がある。

第三節 いのち育ては協働

ヒューマニズムの心に支えられ、きびしく、たしかに、おおらかに看護の目から医療現場の喜び、哀しみを綴るのが宮内美佐子。いつの頃からか私の書棚には、宮内のぬくもりのある著作が並ぶようになった。

『看護病棟日記』（未来社 1987年）

『ナースキャップは「ききみみずきん」』（未来社 1988年）

『木もれ日の病棟から』（未来社 1991年）

『看護病棟24時』（集英社文庫 1994年）

『患者にまなぶ』（岩波書店 1994年）

「ナースには詩心がなければならない」

「人間の健康な部分をまず知ることなしに〈病い〉を語るのは誤りだ」

このように指摘したのは、報道写真家の岡村昭彦であるが、宮内の文章にはさりげない描写にも詩心が感じられる。また、氏がスケッチすると、なにげない臨床の光景でさえこう映る。

「朝の申し送り—。淀んだ空気を入れ替えようと窓を開ける。すかさず入り込んだ陽の光が、机の上の点滴のピンを見つけて飛びこんでくる。薬品の黄金色は、その瞬間、歓喜のリズムを奏でる」と。

このみずみずしい感性による表現力は一体どこから生まれたのだろうか。

宮内の作品の特徴は、第一に誠実に生きる人々への熱き思い。『患者にまなぶ』には、「人間らしい生活の営みや清潔な感覚、少しでも苦痛が和らぐ満足感、それらは回復への意欲を促す基盤だと思う」と書かれていたけれども、「風の便りが」というエッセイには泣かされた。

第二の特徴は、知性に裏打ちされた人権センス。患者の人権を奪うものに対する激しい怒り。どこからこの感情がわき出てくるだろうと思うほどの鋭さを秘めている。しかもその中に客観性と普遍性をもつことが出来るのは、その豊かな読書生活によるのかもしれない。自分自身の価値観、主張を失わずに生きている人は、とても魅力的である。

京都の病院で結核病棟、地域に根ざした医療にかかわり、東京に出て来てからはターミナルケアや老人医療、そしていまエイズ看護の最前線で活躍する宮内美佐子。鶴見俊輔が指摘するように、「看護婦さんの質というのは、自分の動機とある仕方で結びつけるときに、人間としての器量になるんじゃないですか」。また、徳永進の宮内評のように、「自らの陰をあかりに患者さんの陰を照らせる人」なのであろう。そんな心優しい人だからこそ、ロナルド・ドーアのように、「日本で病気をしたら、宮内さんの勤めている病院に入院したい」という言葉が発せられると思うのである。

ところで、養護教諭の仕事に直接ふれず、なぜ看護の世界に言及したか。それは、宮内の著作はいくらでも教育保健の仕事に読み替えがきくことを明らかにしたかったからである。宮内自身の言葉を借りたらこのように重なる。

「子供の成長をささえ励まし、人間としての人格を尊重し、個性と可能性を引き出し、自分自身や環境とたたかって生きぬく力を育てるのが本来の教育の仕事だとすれば、看護もまた、かけがえのない

人間の生存、人間の可能性に働きかける仕事である」⁹⁾

すぐれた看護婦の仕事のセンスは、養護教諭の仕事を考える上でもおおいに参考になるはずである。

仕事のセンスといえば、京都の養護教諭サークルの仲間が書いた教育実践を紹介しよう。安川恵美子らの『からだがわかれば子どもが変わる』⁹⁾ (農山漁村文化協会刊) は、養護教諭と担任教諭とが協力して「からだ」に働きかけた共同の実践記録である。本書は、子ども同士がお互いの異質性を認めながら共存しており、共生の時代にふさわしい。その典型が、二分脊推児の学習権保障の実践に読みとれる。

子どもの立場に立つ養護教諭の安川は、いつもおしっこのおいさをブンブンさせている武のケースに全力で関わった。みんなと一緒に水泳学習に参加したいという願いを受けとめた安川は、学習権保障の観点から教職員に問題提起。しかし、「排尿障害があるのだからプールに入れないのはあたりまえ」という認識の厚い壁。みんなの問題にはなっていなかった。が、ここで引きさがらないのが民主主義の底力。校内では障害児教育委員会で組織的に取り組み、一方、校外では二分脊椎疾患を守る会と連絡をとりながら、専門医との連携で再スタート。こうした様々な支援によって、学校での自己導尿も開始。武の自立への見通しがもてた時、親もまた変わっていったという。もっとも手のかかる子をいとおしく思えるか！この問いかけは、親・教師にとって試金石となる。

こうした「教職員と一体になってすすめる学校保健」を見守ったのが、担任の清水良子であった。やがて清水は、子どものエネルギーを心から受容し、理解者を広げつつ子どもに寄り添いながら働きかけ、「からだの学習を通して育つ健太と学級集団づくり」と「生活科で“からだ”を教える」という二つの実践をまとめた。

それにしてもサークル仲間は頼もしい。二人の教育実践をかまえず、さりげなくコメントしたのが中村恵子である。その明晰さ、正確さ、視点の発見が実にいい。いま、サークル「ひとみ」(奥川祐子代表) は、全国養護教諭サークル協議会を支える学習集団として着実に成長している。ひとみの『ミニ・レポート集』は12号を重ね、実践の集約を刊行し続けているのである。

第四節 保健室でおこなう楽しい保健指導

〈“花さき山”のあやになって花をさかせよう〉

いい冬休みをおくれましたか。

みなさんは“花さき山”のお話知っていますか。

図書室にありますので一度読んでください。

“あや”という女の子が、自分より小さい子をかばったりやさしくしたことを“やまんぼ”がちゃんとみていて“あや”にいうのです。

“花さき山の いちめんの花、つらいのを しんぼうして じぶんのことより、ひとのことを おもって なみだをためて しんぼうすると、そのやさしさと けなげさが花になって さくんだよ”

人間のからだって不思議です。いつもおこったり、イライラしたりクヨクヨしているとそれだけで病気になってしまうことがあります。からだのホルモンのバランスがくずれるからです。

からだにホルモンをつくる“ふくじん”というものがああります。ここでつくられるホルモンは、内臓をしげしげ働きをよくしたり、栄養のバランスをとったりする大切なホルモンです。このホルモンが一番よく出るのは「あついいことしたな」と思ったときなのだそうです。

人にいじわるしたり、にくんだり、クヨクヨすると、このホルモンがでにくくなって病気になってしまうこともあります。花さき山の“あや”のように、人のためにいいことして花をいっぱい胸にさかせると“ふくじんホルモン”もわき出て、すばらしい心とからだの育ちますよ。

*

これは、兵庫県の養護教諭・小西穎子の「保健だより」のことばである。なんとしなやかな感性の持ち主であることか。

この小西が『のびよう子らとともに一養護教諭の歩んだ道』(医療図書出版社刊)を携えて、さっそうとデビューしたのは18年前であった。次の小西評は、教育学研究者・汲田克夫のものである。

「著者の貪欲な知識欲、鋭い感受性、子どもたちへの誠実さ、正義と民主主義をどこまでも貫く意志的な行動力、理論と実践との統一を求めてやまないねばり強さ、仲間への熱い連帯意識に、私はただただ驚くばかりである。」

1995年の第25回全養サ兵庫研究集会の実行委員長を引き受けたことからわかるように、小西のスタンスは全く変わらない。しかもその印象は実践の深まりとともに、より確かに、したたかになったように思われる。近年のゆたかな実践の結晶が、この『保健室でおこなう楽しい保健指導』¹⁰⁾。実践というのはこの本のように、のめりこむぐらいにならないと、面白味が出てこないのかもしれない。

本書の構成は、「ワクワク保健室」から「血液とケガの手当て」までの14章。睡眠、排便、心臓、かぜの予

防、タバコと肺、歯、目、耳、足、血液について、その指導ポイントを明示しつつ、先生と子どもとの楽しい対話で深いからだの学習がすすむ。大学の授業で本書の「足」をともに学んだとき、こんな感想がとび出した。

「体重測定にいくまでの足の説明というイントロダクションのようなものがすごかった。何にでも目的とそれを達成するまでの過程というものが必要だが、この先生は過程の部分を使って子どもたちに足というもののすべてを教えていたと思う。何げなく体についているとしか思わないで、なにげなくいつも動かしていた足。実にすばらしいやり方で教えていてすごいと思った。」(泰枝)

この本を読んで、養護教諭へのあこがれをふくらませた未来の教師もいた。阪神・淡路大震災という悲しみをのり越えて開かれた、全養サ兵庫集会。養護教諭集団のエネルギーはすごい。

第五節 アメリカの学校保健とスクールナース

いじめを苦しめた子どもの自殺に象徴されるように、子どもたちのかかえる健康課題は重い。愛媛でも、この3年間に中学生が3人亡くなっている。

ところで、日本の学校に唯一の専任の健康担当教師として存在する養護教諭。その集団は子どもの実態を直視しながら働きかけ、仕事を創ってきた。藤田和也はすでに述べたように、長年サークルで学ぶ養護教諭に寄り添いながら、教育実践に焦点をすえて学校保健の理論化をすすめてきた。『養護教諭実践論』(青木書店刊)から10年。国際化の動向に対応して『アメリカの学校保健とスクールナース』¹³⁾を刊行した。

そのまえがきで触れられているように、本書は1990年4月から2年間アメリカ合衆国に滞在して、スクールナースや保健教育の実態について視察・調査してきた成果の報告である。その内容は三部構成。第一部は、アメリカの学校保健におけるスクールナースの役割。第二部はスクールナース訪問記。第三部はアメリカの保健教育。

このなかで私の興味を強く刺激したのが、30数名のスクールナースへのインタビューであった。

「どのスクールナースも一様に子どもたちをこよなく愛し、彼らと接している時が最も満足感をもつ時だと答えていた」

この基本的な役割においては、日本の養護教諭とまったく共通しているようである。しかし、アメリカのスクールナースは、学校においてプライマリーケアを提供する制度(人と役割)であって、まさにナースとしての専門的な機能を発揮する存在となるのであ

る。端的に言えば、「教育実践」と「看護実践」の違いがある。つまり、アメリカには、看護婦の免許をもたないスクールナースは存在しない。また、日本のように各学校に置かれ、健康診断や他の学校保健活動に深くかかわって活動している所はまずないとみてよいだろう。

こうした制度上の違いにもかかわらず、日本の養護教諭の仕事である「子どもの健康を守り育てる」機能は、きわめて重要であること、またその充実のためには、教職員、父母との共同が大切であることを教えてくれる。

子どもの健康保護と発達保障という2つの軸で教育実践をすすめる養護教諭にとって、本書は有益な示唆を与えてくれるであろう。

おわりに

「養護教諭は『日本の近代教育の確立の中に欠かせない子どもの健康な成長を、守り育て教え、地域に根ざした健康教育を確立すべく、看護機能と教育機能の統合した新たな教育職(日本独自の)として』学校看護婦の前身から養護教諭としての本務確立の道を歩んできた。」

「日本女性史に残る学校看護婦の身分確立運動。この運動からわれわれは何を学び受けつぐか。

◎教育の中で子どもの健康実態に密着した実践

◎仲間と理想を一致させつつ民主的集団を確立する

◎子どもの健康問題を中心に教師父母との連帯

これは、1941年に法制化された保健婦と養護教諭の成立過程を論及した坂本玄子の「戦争と看護 制度発足50周年の視点から」¹³⁾の一節である。坂本は「子どもと共に歩み続ける養護教諭こそ未来像」と言いきっている。

また、「長いようで短った 自分との闘いの歴史をふり返って」という手記のなかで、京都の奥川祐子は次のように述べている。

「養護教諭として仕事を進める上で大切なことは、次の二点であることも学びました。

常に自分の仕事は、

①子どもの側に立ったものであるか

②仲間や後に続く養護教諭のためになっているかでした。しかし、この二点を押し進めることは、たいへん勇気のいることでもありました。」¹³⁾

奥川が代表をつとめるサークル「ひとみ」は、会員の実践をまとめた『ミニ・レポート集』を、現在12号まで刊行している。ここにはスガワラの提唱した4つ

のク運動がみごとに結実していると言ってもよいだろう。

養護教諭のすぐれた組織者であり実践家でもある富山美美子は、最近、『保健・医療がわかる本』¹⁴⁾の「養護教諭という仕事」の項で、養護教諭が教育職であること、人間らしい生活づくりがいま大切であること等を強調している。

こうした課題に積極的にこたえようとするのが、サークルで学び成長する養護教諭たちである。私は第3回全国養護教諭サークル協議会の京都集会から参加してきたが、1996年の第26回全養サ埼玉研究集会では研究推進委員長の岩辺京子はその総括を示した。そこには、「教育保健学」が担わなければならない課題と克服の道が提案されている¹⁵⁾。

教育基本法50年を迎えるいま、かつて徴兵制のもとで丈夫な身体を持つが故に戦場で生命を奪われた痛恨の歴史的教訓を学ばなければならないのである。

注

- 1) 拙稿「文学の中の養護教諭像(1) 一本庄陸男の『白い壁』を中心に」『教育保健研究』第4号 1986年
- 2) 唐津秀雄『教育保健学序説』 自費出版 1990年
- 3) 石田和男編著『登校拒否をのりこえる』 青木書店 1990年
- 4) あんもないと「養護教諭代える方法教えて」 愛媛新聞 1991年7月18日付
- 5) 河井寛次郎『いのちの窓』 東峰書房 1975年
- 6) 松尾裕子, 高岡信子, 天木和子, 橋本喜美代『学校で健康文化を創る』 農山漁村文化協会 1995年
- 7) 長野県教職員組合養護教員部・藤田和也編『教室へ行かれない子どもたちとともに』 東山書房 1996年
- 8) 宮内美佐子『看護病棟日記』 未来社 1987年
- 9) 安川恵美子・清水良子・中村恵子『からだがわかれば 子どもが変わる』 農山漁村文化協会 1993年
- 10) 小西穎子『保健室でおこなう楽しい保健指導』 清風堂書店出版部 1994年
- 11) 藤田和也『アメリカの学校保健とスクールナース』 大修館書店 1995年
- 12) 坂本玄子「戦争と看護 制度発足50周年の視点から」『看護実践の科学』第16巻13号 1991年
- 13) 奥川祐子「長いようで短った 自分との歴史をふり返って」『保健室』No.38. 農文協 1992年
- 14) 富山美美子「養護教諭という仕事」 国民医療研究所編『保健・医療の仕事がわかる本』 本の泉社 1996年
- 15) 全養サ「埼玉研究集会報告集」 1996年